

## 特別寄稿

# 常識 common sense を疑い共通感覚 sensus communis を呼び醒ます —「感性教育」の目指すもの—

西南学院大学人間科学研究科臨床心理学専攻 小林隆児

本学に着任してから早や6年が過ぎた。25歳で精神科医になってから、医学、教育、福祉、そして心理と、専門領域こそ違え、一貫して大学教育に従事してきた。それも残すところあと2年となった。振り返ってみると、使い古されたせりふであるが、長いようでじつに短いものであった。人生残り何年かと真面目に考えるようになった。60代に入ってから人を育てる教育の大切さが身に沁みるようになった。

前任の大学ですでに少しは始めていたが、本学に着任してから本格的に開始したのが「感性教育」(小林, 2017a; 小林, 2017b)であった。大学は高等専門教育の場とされているが、そこで行なわれている教育の内実を眺めてみると、人間の理性に働きかける専門知識を授けることにはいたく熱心だが、理性の働きを根底で支えているはずの感性に働きかけることにはひどく疎い教員が多いように見える。何を隠そう、昔の私も同類のようなものだった。

福祉や心理の臨床において、患者の話に耳を傾け、丁寧に聞き取る「傾聴」はいまや常識となっている。ケースカンファレンスで臨床心理士や精神科医の事例報告を聞くと、たしかに患者や家族の話丁寧に聞いていることは、報告内容によく反映されている。しかし、聞いている私の心に響いたものは数えるほどしか記憶にない。それはなぜか。臨床家自身が患者との面接で両者間に立ち上がる心

の動き、つまりは患者の話聞いて、何を感じ、何を考え、何を返したか、丁寧に取り上げて報告するものがほとんどないからである。臨床家が患者との面接で自らの主体性を自覚した報告のことである。

\*

20数年前、ある大学の 신설学部に着任した私は母子ユニット Mother-Infant Unit を創設し、「関係をみる」臨床を開始した。ここでの経験はそれまでの私の臨床を大きく変えた。「個をみる」臨床と「関係をみる」臨床との根本的な違いがわかった。それは何かといえば、「リアリティとしての現実をみる」ことと「アクチュアリティとしての現実をみる」ことの違いであった。患者の話丁寧に聞いて、掬い取り、報告すること、患者の症状を丁寧に捉えて診断し治療すること、これらはすべて前者に属する営みである。後者はそれとはまったく異なることがよくわかった。

「アクチュアリティとしての現実をみる」臨床は、1時間の面接全体の流れのなかで患者と治療者とのあいだに何が起きているのか、両者の心はどのように動いたのかを捉えることにある。時々刻々と変化し続けるアクチュアリティとしての現実を捉えることはそのことを意味する。私にこのことの大切さを確かなものとしてくれた契機はいくつもがあるが、そのなかの一つにつきのような経験があった。

\*

10年以上前の話である。大学の心理相談での初回面接であった。7歳の男児が母親と祖母に連れられてきた。母親の心配は子どもがアスペルガー障害ではないかとのことであった。最近、就学相談で教育委員会に出かけたけれど、そこでひどく冷たい対応をされたらしい。私は広い遊戯療法室で3人と会うことにした。子どもは臨床心理士養成の大学院生が相手をし、私は母親と祖母を相手に面接をすることにした。子どもたちは同じ部屋にはいたが、遠くで遊んでいた。母親はまだ怒りが収まらないのか、最初から勢いよくつぎつぎに話を続けていた。聞いてほしいことがたくさんありそうだったので、しばらく黙って聞いていた。すでに30分くらい時間が経ってしまった。このまま聞いているだけでは、この人はずっと話し続けるのではないかとさすがの私も心配になった。頃合いを見計らって、私はそれまでに感じていたことを、つぎのように語りかけた。「お母さん、大変でしたね。お母さんの話を聞いていて、とても大変だということがわかりました。お母さんはこれまでまるで『遊びのないハンドルで一所懸命運転してこられた』みたいですね」と。すると驚いたことに、それまで一方的に話し続けていた母親が突然話を止めてしまったのである。母親の目頭がみるみる熱くなってくるのが見ていてすぐにわかった。しばらく私は黙っていた。すると驚いたことに、遠くにいた子どもが突然大きなボールをこちらの方に投げたのである。母親はすぐに子どもに「だめでしょ。危ないでしょ」と注意した。でも私は子どもがなぜそうしたかすぐにわかった。だから私はおどけて驚かせてみせた。すると、さらに驚かされたのだが、子どもはこちらに走ってきて、後ろから母親に

抱きついたのである。それはそれは感動的な場面であった。そのとき、なぜ子どもはこんな行動をとったのか、私にはすぐにわかった。それまで母親は身構えながら緊張して張り詰めた思いだったのであろうが、先の私の一言で、自分の不安な気持ちを感じ取ってもらったという安堵が母親の緊張を緩めたのであろう。子どもから見れば、近寄りがたかった母親がそうでなくなったのである。だから子どもはすぐに反応して、それまで抑えていた「甘え」を先のようなかたちで表現したのだ。もちろん、その時私も母親に対して安心して相対することができるようになったのである。

ここでなぜ私が母親との面接で感じたことを取り上げたかと言えば、母親と私のあいだに立ち上がっている心の動きは、子どもと母親とのあいだでも同様に立ち上がっていると考えていたからである。わかりやすく言えば、私は母親のアンビヴァレンスを感じ取り、それへの気づきを母親に促すことによって、母子間に同様に立ち上がっているアンビヴァレンスを結果的に緩和することをねらったということである。

\*

ここで考えてみて欲しいのは、先のエピソードのなかで私が母親との面接のなかで「お母さんはこれまでまるで『遊びのないハンドルで一所懸命運転してこられた』みたい」と感じ取ることを可能にしたのは何かということである。

なぜ私がこのことを取り上げたかといえば、母親との面接を通してずっと感じていたことが、母親の心のありようを理解する上で核心ともいえるものだと嗅ぎ取っていたからである。

一方的に話し続ける母親の心情を理解しつ

つも、相手のことがほとんど目に入らないほどに心のゆとりを失っている母親を目の前にして、日頃の母子関係も容易に想像できた。そんなことを考えていて、このようなセリフが思わず口から出たように思う。私と母親とのあいだに立ち上がった心の動きを感じ取り、それを言葉にしたのだが、それを可能にしてくれたのはある種の知覚ないし感覚の働きに依っている。それがスターン (Stern, 2010) のいう力動感 vitality affect である。原初的知覚の一種だが、それと同じことを意味するものに共通感覚がある。

共通感覚 (センス・コムニス) はもともと古代ギリシャでアリストテレスが取り上げたことでよく知られ、「異なった個別感覚の間の識別や比較のほか、感覚作用そのものを感じうだけでなく、いかなる個別感覚によっても捉ええない運動、静止、形、大きさ、数、一 (統一) などを知覚することができる」(中村、1979) 性質を有する知覚感覚体験である。

それゆえ共通感覚で感じ取ったことを言葉にする際には、どうしてもメタファに頼らざるをえない。先のセリフ「遊びのないハンドルで一所懸命運転してこられたみたい」はそうにして思わず口から出たものである。このメタファが生まれる前の私はというと、正直言って母親の延々と続く愚痴っぽい話に辟易とした気分を襲われていた。もし、私の思いがそこで留まっていたならば、先のような劇的な治療的転機は訪れて来なかったはずである。今振り返ってみると、私は母親とのあいだにアンビヴァレントな情動の動きを感じ取り、それが子どもと母親とのあいだにも同様に立ち上がり、それが両者の関係を拗らせる元凶になっていると考えたからこそ出たセリフだった

のであろう。そこに根源的不安としての甘えのアンビヴァレンスを見て取っていたということである。

「関係をみる」臨床を私が強調するのは、このアンビヴァレンスを<患者-治療者>関係において感じ取るためには「関係をみる」ことが不可欠だと考えているからである。(小林、印刷中)。

おそらくは臨床教育の場でも<患者-治療者>関係の重要性はいつも指摘されていることだとは思う。ただ、それが実際どういうことかを体験的に学習するためにはどうしたらよいか。それがとても難しい。私は母子ユニットでの14年間の臨床の蓄積とその後の記録ビデオを何十回となく振り返ることによって、「関係をみる」ことのコツを掴むことができた。それゆえ、学生にも私の学びと同じようなことを経験してもらうために「感性教育」を試みるようになった。

\*

これまで私は「感性教育」を本学で学部生、大学院生に試みてきたが、それと並行して他大学の大学院生にも実施してきた。すると、3日間(1日5コマ計15コマ)の集中講義では格段の教育的効果が生まれることを実感した。

1日に数例、新奇場面法で母子を観察録画した記録ビデオを学生に供覧し、そこにどのような関係が展開しているかを感じるままに述べてもらいながら、対話を積み重ね考えていくというものである。方法はいたって単純だが、いざ試みると、学生は異口同音にその難しさとともにしんどさを報告する。自ら感じ取ったことを率直に表現することがこれほど大変なことなのかと、学生のみならず私自身も改めて考えさせられる思いであった。タビストツ

クの乳児観察 infant observation に倣って言えば、この試みは母子観察 mother-infant observation ということになるだろうか。

ある個別の対象を鑑賞してその感想を述べることと「感性教育」はまったく異なったものである。それは何かといえ、母子のあいだに立ち上がる心の動きを感じ取ることが要求される。そのためには自らの内面に立ち上がった情動の動きを通して掴み取ることが要求されるからである。すると驚いたことに、多くの学生が自らの情動の動きに対して無意識に蓋をして見ようとしないうちに気づく。それは学生にとって衝撃的な体験である。幸い多くの学生はその起源に自らの幼少期の「甘え」体験が深く関係していることにも気づく。このような変化と気づきは私の日頃の心理療法の治療プロセスでの患者の心的変化とまったくと言っていいほど同じものである。

「感性教育」での体験談をすべての学生が率直に述べてくれるが、それは感動的な内容ばかりである(小林、2018)。これこそ教育の醍醐味である。ある大学院生の体験談を紹介しよう。

タイトル「絡まった糸がほどける」 H子

私はこの講義を通して、自分はなぜこのような考え方をするのか問いかけていくうちに、自分の過去を振り返り、今の自分と今まで腑に落ちていなかった出来事が次々つながった。私にとってこの体験は、絡まっていた糸がほどけていくような体験だった。

1日目の講義の際にA子さんの感想(受講生に紹介した学部2年のある女子学生の感想を指す)を読んで、私は自分の足りないところを反省するばかりで、「自分の考え方の癖を

考える」、「自分のアンビヴァレンスについて考える」ということがどういうことなのかよくわかっていなかった。むしろ、考えたくないという気持ちの方が大きかった。

しかし、2日目の講義で、2歳1ヶ月の男児例(甘えたくても甘えられない男児が母親不在のときにストレンジャーを相手に遊んでいて、次第に楽しくなり甘えなくなったのか、ストレンジャーの手を取りそうになった途端に母親が再入室してきた。そのことにすぐに気づいた男児は不自然な格好をしてストレンジャーから離れ、ニコニコしながら母親に近づき、母親の手を取って機嫌を取る仕草を見せた事例)のディスカッションを通して、自分の内側が大きく揺さぶられるような感じがした。それは、この事例の後半のシーンは「子どもが母親に媚を売っている」場面だと聞いたときだった。自分にはそんな考えは全く浮かばなかったし、意図的に媚びているわけではないが、子どもでもそんなことを考えるのかと思った。

自分がこう思ったのはなぜだろうかと自分自身に問いかけると、私はいつも自分の悲しみや苦しみ、怒り、妬みなどの負の感情を人前ではあまり出さないようにしていたことに気づいた。そこから過去を振り返って考えてみた。

小中学生のころ、私は周りの子に比べて成績が良かったし、だらしない兄と比べると、几帳面な子だった。母はそんな私を褒めてくれていた。今振り返ると、私は母に褒められたくて勉強をし、几帳面になっていたのかもしれない。そんな自分に自信があったが、受験期に大きな不安に襲われ、志望校を変えたいと母に泣きながら伝えたが、「絶対に受かるから」と言われた。本当は母に自分の思いを受けとめてほしかったが、突き放されたような感

じがした。

この頃から私の中には、母は私のいいところは褒めてくれるが、私の辛さは分かろうとしてくれないという思いがあったのかもしれない。そして、無意識だったと思うが、人前ではあまり本音を言わず、愛想よく振る舞うことが多くなっていた。このような体験から、現在の「負の感情を表に出さない私」がいるのだと気づいた。

大学に入ってから自分について考えることは多々あったが、「いつもこうなってしまう自分はダメな人間だ」という否定的な気持ちしか浮かばなかった。しかしこのときは全く違っていて、今まで考えたこともなかった自分がいたことに気づけたことがとても嬉しかった。私はこのとき泣いていたが、その涙は苦しみだけではなく、喜びや感動もあり、さまざまな感情が入り混じった涙だった。

自分の母とのことを振り返るなかで、母に対して「あのときこうしてほしかった」という気持ちはあったが、責める気持ちがなかったことには自分でも驚いた。おそらくそれは、母から愛されているということ、母は私のために一生懸命頑張ってくれていたということを実感しているからだと思った。私はこの気持ちを大切にしたいと思った。

また、泣いていた私に声をかけ、私の話をずっと聞いてくれた友人たちには感謝しかない。先生が「相手にすべてをゆだねることで始めて、相手に受け入れられた喜びを感じることができる」とおっしゃっていたが、このことを私は身をもって体験することができた。

私はこの講義を通して、「自分自身のアンビヴァレンスについて考える」とはどういう体験か、身をもって学ぶことができた。しかし、

今はただ自分を理解したにすぎない。今後臨床場面で自分のアンビヴァレンスとどう向き合い、どのようにクライアントを理解するかが課題となるだろう。

\*

この学生の率直な体験談には心を打つものがある。ここで語られていることは、心理療法でいうところの自己洞察そのものである。「感性教育」が学生にとってつらい体験でもあるのは、彼らの幼少期の体験自体に強いアンビヴァレンスが内包されているからである。

患者のアンビヴァレンスに気づくためには、まずは治療者自らのアンビヴァレンスに気づくことが必要になるが、それがとても難しい、と述べたのは「甘え」理論で有名な今は亡き土居健郎(2009)である。

今日の臨床教育をみると、ややもすると専門知識の教授に熱心な教員は多いが、それに偏った教育は、自らのアンビヴァレンスから目を遠ざけ、頭でっかちな臨床家を育てることに与しないかと危惧するのだ。それは単なる杞憂ではない。

毎年2回、社会人向けに本学でリカレント講座を開催しているが、そこで私が目にするのは、数十年乳幼児の臨床に従事し、経験豊富な臨床家であっても、いざ目の前の母子関係を観察する段になると、先入観が頭をよぎって、あるがままに、感じるままに、「関係をみる」ことに甚だしい困難を感じる人たちである。

\*

専門知識は一人歩きするという宿命を負っている。まずは自ら体感しながら、その意味を学び取るという、感性を磨きながら理性を鍛える教育が臨床家養成にはぜひとも必要で

ある。それなくして相手の心を感じ取れる臨床家は育たない。そのためには、これまで常識 common sense とされてきたことを一度は疑い、共通感覚 sensus communis を呼び醒ますことが大切である。「感性教育」の最大のねらいはそこにある。

#### 文献

土居健郎 (2009) 臨床精神医学の方法. 岩崎学術出版社.

小林隆児 (2017a) 臨床力を高めるための感性教育 (研究叢書 No.42). 西南学院大学学術研究所. 非売品.

小林隆児 (2017b) 臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—. 誠信書房.

小林隆児 (2018). なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか. 西南学院大学人間科学論集, 13(2); 215-243.

小林隆児 (印刷中) 発達障碍の精神療法の難しさはどこにあるか. 精神療法, 44(2).

中村雄二郎 (1979) 共通感覚論—知の組みかえのために—. 岩波書店.

Stern, D. N. (2010) *Forms of vitality: Exploring dynamic experience in psychology, the arts, psychotherapy, and development.* Oxford University Press, London.